

医療現場 警戒緩めず

法律上の扱いがらみに緩められた新型コロナウイルス感染症を巡り、県内の医療機関は警戒の手を緩めず診療に当たっている。流行期に定めた事業継続計画（BCP）を徹底させ、医療機関同士で担うことが原則となった入院調整の体制整備も進む。5類移行から8日目で1カ月。収束に向かう中で大きな混乱は生じていないが、仮に再拡大しても地域医療を守るべく奮闘を続けている。



東八幡平病院が5類移行後も入り口に設けている検温スペース。診療体制を維持すべく、コロナ対策は緩めない＝6日、八幡平市柏台

県内 コロナ5類移行あす1カ月

6日午後、八幡平市柏台の東八幡平病院。5類移行前と変わらず、入り口で検温と手指消毒を求める。発熱外来では、車に乗ったまま検査するドライブスルー方式を続けて

長行。「職員は健康管理の意を怠りたくはない」と診療体制の維持に余念がない。滝沢市土沢のゆとりが丘クリニックは、移行前は発熱患者に車内待機を求めていた

県内の入院受け入れ施設は5類移行に合わせて29から76に広がり、510床を確保した。県が担っていた入院調整は原則、医療機関同士で行うが、今のところ難航する事例は起きていない。

職員を班別配置／発熱患者は別室

院内感染防ぐ工夫

いる。

コロナ禍を機にBCPを定めた。職員をグループに分ける。1日に診察する患者約130人のうち、10％程度が発熱を伴うという。全国の直近1週間（5月22

が、今は院内で一般患者との動線を分けて別室に案内する。30人のうち、10％程度が発熱を伴うという。全国の直近1週間（5月22日）の1定点医療機関のコロナ感染者数は3・63人だが、高橋邦尚院長（70）は「当院ではその倍以上の印象だ」と指摘。「『第9波』の心配もあり、感染者の増加に対応できるようなシステム構築を

「コロナは普通の風邪とは違う、また注意が求められる。感染力が強く、院内感染を防ぐ必要がある」と及川忠人院目指したい」と警戒する。市立病院の加藤暁信院長（71）は「現場レベルでコロナの情報共有できるため必要な体制だ。幅広い病院で入院を受け入れ、医療を守っていく」と語る。

感染力は依然強いとされるだけに「第9波が来た場合、高齢者の感染が増えれば、医療・介護施設では本来の活動が困難になることが想定される。コロナに対する関心は持ち続けてほしい」と県民に呼びかける。